自発的な意欲を育ててこそ

世の中には、“やる気”を育てるどころか、反対に、おさえこんだり、ねじまげている親がなんと多いことでしょう。ただ親の意志で子どもを動かそうとします。すると、頼もしい子どもなら必ず反抗するはずです。そうであることが、四歳以後の子どもの本来の姿だからです。

にもかかわらず、こういう時期に、いつまでも親の意志を一方的に押しつけていると、子どもは反抗のかたまりになるか、いつまでたっても“やる気”のない、頼りない子どもになってしまいます。親の意志どおりに動くような子どもを“素直な子ども”だと喜んでいては、とんだまちがいです。

それは“無気力”というものです。わたしは、ほんとに“素直な子ども”というのは、理解力があり、実行力に富み、子どもなりに真剣に考え、自分に納得できて初めてそれを実行する子だろうと思います。

幼児はもともと“やる気”のあるものです。疑問があればほうっておきません。うるさいほど質問するのはそのためです。ですから、漢字があれば、それはなんであるか知ろうとし、そして必ず質問するはずです。親はこの質問を喜び、機をのがさず教えてやれば、幼児はたった一度でその漢字を覚えてしまいます。

ところが、漢字の質問などされると、たいていの親は、それに対して、学校へ行くようになればわかる、という言い方で、教えることを避けます。これでは、子どもは漢字を覚える機会を失うばかりでなく、漢字への関心をも失ってしまいます。

ほんとうの頭の働きは、知識を蓄えることではなくて、その蓄えた知識を使うことです。知識を蓄えるだけなら、あるいは“やる気”がなくてもある程度可能でしょうが、使うとなると、“やる気”がなくては使えるものではありません。

もともと、幼児は、三歳ごろから、ぼつぼつ“やる気”の芽を出し、四～五歳になると、何かを求める行動が活発になるものです。何かを求めてそれが成功した時の快感が、また次の何かを求める気持を誘います。これが“やる気”なのです。

何かを求めてそれに成功した、それだけでも“やる気”は育ちますが、それを親に認められ褒められると、その成功の喜びは一層強まり、したがって“やる気”も一層強まります。